

大通和座通信

YAMATOZA

日々新面目

其の十七

安東伸元

世界の先進国への仲間入りを目指して近代国家建設に身を挺した明治維新の指導者の中には、実に頭の良い知恵者がいたようである。文明開化の号令と共に西欧文化の潮流が日本列島の波打ち際を襲い、音楽取調掛という政府機関も出来、国内の文化様相が一変する。音楽は西欧の音楽理論に従い、おびただしい種類の西洋楽器がそれまでの邦楽器に取って代わる。演劇は写実的舞台芸術思想が根を下ろして、芝居小屋は歴史的記念物になり額縁形式の西洋近代劇場が主流になる。その外数え上げれば際限のない改変と変容の波が、それを是とする国民によって国の津々浦々に行き渡り、「ざんぎり頭を叩いてみれば文明開化の音がする」の流行語を生み出す。これは正しく明治の文化大革命であったと言える。この革命騒ぎの最中に、新政府

の首脳たちがはたと思索をしなくてはならぬ一つの問題があつたと考えられる。近代合理主義思想を人間作りの根幹に据える事を国策と決定し、新しく生まれた舞台芸術という観念に基づいて洋楽・洋舞・西洋近代演劇というもののが日常生活の場のみならず教育の中にも取り込まれた。さてそこで生じた重大な問題は、それならばそれまで主流であつた我が国固有の伝統芸能文化をどのように取り扱い位置付けて対処すればいいかという事であつた。国を挙げた西欧化に伴って数多の伝統的民俗芸能が姿を消した。我が国の古典芸能の中枢に位置する能楽・文楽・歌舞伎などをそのような民俗芸能と同列に置くのは流石に忍びない、さりとて新しく登場した西洋の舞台芸術と同列に扱うには整合性に問題があつてはばかられる。そこで大いに困り苦慮の果てに次のような方策を考え出した高官がいたのでないかと想像するのである。つまり捨てるに惜しいものを一まとめに括り「古典伝統芸能」という名札を付け、なお「取扱注意」「別枠要保存」の付箋を付けて、取りあえず床の間の違い棚に収納したわけである。その妙案を案出した策士を、私は知恵者だと言っているのである。さてこの様子で温存された古典伝統芸能は、相対的理解の上で舞台芸術でも民俗芸能でもなく、つまり演劇か伝統芸能かの論議に明確な答

えを与えられないまま旧態を変えず今日に至っている。その能楽に二〇〇一年国際的なスポーツが当たる。国連のユネスコが世界重要無形文化遺産という認定を与えたのである。もう少し詳しく説明すると「人類のための口承による無形文化遺産の傑作」と日本の能楽を位置付けたのである。地球上の人類にとって・・・と明言しているわけだから、この認定は日本国民の等しく名誉にも誇りにも思ふべき慶事のはずであるのにその意識が一向に芽生えない。この出来事によって、国内における能楽への評価や論究に新しい視点が加わった様子はない。先頃の衆議院選挙の結果について自民党の圧倒的勝利を予想外と驚く声が大い。実は私も驚き、その現象の解析に苦悩している。改革の是か非かが声高に叫ばれ、旧態の自民党政治からの脱皮を望む民意が動いて、総裁がヒーローになつたわけであるが、空騒ぎが終わつた後の結果は、これで政治と社会が劇的に変わろうとはとうてい思えない状況である。どうやらこの国の大衆は価値観の変化をもたらせる程の改革変化を望んでいないように思われる。今回の選挙では、これまでになく政と官が癒着連動する社会構図が明らかになつたし、その系譜に連なる守旧派政治家の幾人かは事実上活動の場を失つたけれど体制や思想の基盤に変化の予兆は見られない。したがって

閉塞感は一掃されそうにもない。我が国・民族の精神的根幹である古典芸術文化については前述したように、明治維新に冷凍保存した姿のまま放置して再考をせず、一方西欧文明文化の摂取には真つ先駆ける国つくりを熱心に推進してきた指導者達。その間に繋がる政治家集団と役人、その彼らが積み上げてきた権益と既得権の巨大な山脈がある。天下り・世襲・学閥・閥閥が幅をきかし特権的横行を許す社会制度が、いわゆるこのエリートと言われる集団の安泰をがっちり支えている。その余禄に連なつて、伝統芸能の世界では家筋・名門と名指しされる人々の存続が保証されて目出度い事である。さて今回、この構造に改革の手が加えられるかも知れぬと言つ期待はどうやら空振りに終わりそうである。民意はそこまでの改革を望んでいない事も解つた。見事に思考せず、牙を抜かれた大衆が育つてきた。安直な手軽さを良しとする文化が広がつて、人間の資質を変容させている事実も知つた。これが只今の正直な感想である。今年も島根大学へ三日間の集中講義に出掛けた。書類の入つた封筒には「国立大学法人 島根大学」の文字。私の担当講座名は「音楽科教材開発特論」、履修学生は音楽(教科)教育を専修する大学院生十名である。持ち帰つたレポートから二件抜粋紹介に及びたいと思う。現実の生の声を

伝えたいのである。まず一つは「私は日本人なのに」と思つたこの集中講義と表題を付けた女子学生のもの。「私は日本人だ。日本育ちだ。それなのに小学校では英語を学んだし、バレエも習つた。大学ではバイオリンを弾いていて……私の周りには西洋から伝わってきた物ばかり。私には、正直に言つと日本人としての誇りが無い。今回の講義で初めてそう気づいた。伝統芸能と聞くと、堅苦しく敷居の高い物という印象があつた。その理由は、自分が演じる事は不可能だし、世界が違うと思つていたからだが、私のとんだ勘違いだった。そんな事を言つ暇があるなら「雪山」を自分のものにしてやるつ、そう思つた。この講義で「雪山」を謡つたり、先生を見よう見まねして舞つたり、狂言を演じたりして、自分の発音の曖昧さを自分で認識した。楽器を演奏する時に一番必要なのは、自分が表現しようとしている事を聴き手に解るように伝える事だと思つた。日本人なのに日本語の歌もきちんと謡えない、伝えられない自分を情けなく思つた。しかしそれと同時に、私は日本語の美しさとは何なのか考え始めることができた。また音楽にも言える事だが、舞を見ていて、静があることで動が活きると言つ事を視覚的にも感じる事ができた。「百聞は一見に如かず」という言葉があるが、今回は本当にこの言葉がぴつたり

だと思つた。大学院に入らなければこの講義を受ける事はなかつたし、日本人としての自分を振り返る事はなかつた。能楽に(というより、むしろ先生に)出会えて、自分そのものを見つめ直すきっかけができた。この講義を一緒に受けた二人の留学生は自国の文化に誇りを持っていてと思つた。私は恥ずかしい事だけれど、日本の文化をよく知らない。だからこれからは胸を張つて日本の古典(クラシック)について語れる日本人に、日本人としての感覚を身につけた上で西洋音楽に迫つていける人間になる、と強く思つた」もう一つ管楽器を専攻する男子学生の一文におつき合い願いたい。「狂言全体の印象としては、笑いの質や奥深さが、現代劇やテレビで観る芸能とは明らかに違つて感じました。正直、私にとつて狂言は未知の芸術でした。音楽を専攻にしている人間でさえ、ライブのまま本物を観る機会がないため、良いか悪いかという事よりも、ただただ目の前で起こつている事を観て感じるのて精一杯だったような気がします。私自身、日常的に扱っている音楽がイギリスの音楽中心なので自分の音楽のベースは洋楽にあるのだと思つていました。しかし、能や狂言に触れる事で、自分は日本人でそのベースは、実は日本にあるという事が認識できたと思います。文学的な要素、音楽的な要素、舞踏的な要素も自

分の民族が持つベースが生かされるからこそ、西洋音楽の持つ理論的な要素がもつと深みのあるものになるのだと感じました。三日間の集中講義で学んだ量は決して多くはありませんが、これからの音楽を含めたすべての芸術活動に活かせそうです。ありがとうございました」これらは、ごく普通の学生が素朴に表明する感想報告文である。私は二五年前からこれと同種のレポートを大量に受け取り続けてきた。そして毎年、古典伝統芸能を取り巻く環境が何一つ変わっていない現実を知らされる驚きと落胆を味わい続けてもきた。有能な資質をもつと思われる学生ですら、古典芸能についてこのような感想しか持ち得ない状況が教育の現場に在ってこれがいささかも改善されていないのである。人間の感性や人格を形成する古典という視点が無く、高級な趣味嗜好という風情で取り上げられるから、大方が真面目に取り組まないわけである。

この国が変わらないと分かった以上、私はまた仕切り直そうと思っっている。官の言う事もマスメディアの言う事も意にかけず己が分をわきまえ、身近な有志の若者たちと正面切って付き合っていきたいと思う。十五年振りに検診を受け、胃潰瘍が見つかり薬物治療で改善、これを機に禁煙したところさぐさま四キロ体重が増えた。国は当てにならぬから、せめて自分を変えようと

いうわけではないが…

(九月二六日)



安東 伸元(あんどうのぶもと)

一九三五年大阪生まれ。一九六四年能楽協会入会、狂言方能楽師になる。茂山忠三郎家同門。一九八一年より教育機関へ出講。現在、羽衣国際大学名誉教授、大阪芸術大学・大阪府立東住吉高等学校・NHK大阪文化センターの非常勤講師。二一年、重要無形文化財(能楽)保持者総合認定を受け、「日本能楽会」会員。「大和座狂言事務所」を主宰。

狂言を読む「鈍太郎」

もろきゆう

日曜日の出勤は楽で良い。通勤時間帯であるにもかかわらず空席が多い。ある日曜日のこと、私はゆったりと席に座り、気持ちよく本を読んでいた。そこへ三人の女子高生が乗り込んできた。彼女たちは三人並んで座れる席がないので通路でわいわい言っていた。すると私の隣の女性が端によってどうぞとスペースを空けてくれた。それでも二人しか座れないので、もう一人は向かいの席に座って通路を挟んでわいわいしゃべり出した。このまま十五分間、駅につくまでにぎやかになるのかと観念した時、静かになった。見ると無邪気におにぎりにかぶりついている。襟に飛んだご飯つぶを丁寧にとって口に運んでいる姿を見て、「いまどきの女子高生は…」とつぶやきそうになつて、見回すとまつげを挟んでいる人や携帯のゲームに夢中になつている人もいる。女子高生だけではない。みんな他人の目に対して鈍感になつてきているのだ。

ところでこの「鈍感」の「鈍」という字が「太郎」の頭についた名前がある。「鈍太郎」という。日本国語大辞典によると一般名詞として「鈍太郎」はおろかで鈍い人という意味を載せている。狂言に登場する

「太郎・次郎」はたまにとぼけたことをしたり、馬鹿なことをしたりするが、それ以上の愚か者という意味だろう。この「鈍太郎」という題名がついた狂言の内容は次の通りである。

鈍太郎は訴訟のために三年間西国に下っていたが訴訟に勝ち、都に戻ってきた。鈍太郎には二人の妻がいるが、まず下京の妻に会いに行った。すると妻は「鈍太郎は三年前に西国に下って留守だ」という。「その鈍太郎とは自分のことだ」と言っても聞き入れない。近所の若衆がからかいに来ているのだろうと言い、三年間手紙もよさない夫を見限って棒使いを夫に迎えたというのである。「戸を蹴破って入る」というと、「棒使いの夫よ狼藉者だ！」と叫ぶ始末。そこで鈍太郎は下京の妻を見限って上京の第二夫人の元へと行った。器量よしの第二夫人なら受け入れてくれるだろうと高をくくっていると、第二夫人も長刀使いと一緒にになったと言うではないか。二人の女房に見捨てられたと思った鈍太郎は発心（ほっしん）を起こし諸国修行に出ると言い捨てて立ち去った。一方、昨日追い返した男は実の夫だと気づいた下京の妻は上京の妻の元へ行き、夫の行方を尋ねた。二人は改めて昨日の男は鈍太郎だと確認し、下京の妻は道すがら鈍太郎が出家をして諸国修行に出るといふ噂を聞きつけたと言ふ。

それならと街道に出て探していると、念仏を唱えながら歩く鈍太郎に出会った。二人の妻は勘違いで追い返した事を謝り、鈍太郎に諸国修行を思いとどまるよう説得した。鈍太郎は二人の行為を責め、からかいながらも思いとどまることにし、二人の妻の手車に乗って囃しながら家へ戻るといふ話である。この筋をまとめるとつぎの通りになる。訴訟で西国に下っていた鈍太郎が都に戻る。下京にいる妻の元にゆくと近所の若衆と間違えられて追い返され、上京にいる妻の元へゆくとやはり近所の若衆と間違えられて追い返される。二人の妻が新しい夫を持ったと勘違いした鈍太郎は出家する。二人の妻は勘違いに気づいて鈍太郎を捜す。鈍太郎に出会った二人は家に戻るよう説得する。誤解が解けて鈍太郎は出家をやめて二人の妻の手車に乗って帰る。

ところで、室町末期から江戸初期にかけて民衆に親しまれた『御伽草子』という絵入り本がある。これにはのちにおとぎ話として親しまれた「一寸法師」や「酒呑童子」「ものぐさ太郎」なども収められている。その中に「さいき」という奇妙な題名の物語があり、「鈍太郎」とよく似た話である。豊前の国の佐伯（さいき）という男が所領争いの訴訟で京の都にのぼった。長期の滞在となった佐伯は清水寺に参籠し早期解

決を祈願するが、そのとき清水の境内で年の頃なら二十歳ばかりの美麗な女房を見初める。歌を贈るところよい返事があり、二人は結ばれた。その後、佐伯はこの都の女房の力添えもあり、訴訟に勝って国元へ帰ることとなった。佐伯は都の女房に後日迎えに来ることを約束して、そのしるしとして髪の毛まで渡して帰国した。しかし、国元に帰ると男は都の女房のことをすっかり忘れて三年の歳月が流れた。待ちこがれた都の女房は行脚（あんぎゃ）の僧に手紙を託し佐伯の館に届けてもらった。鷹狩りで留守にしていた佐伯のかわりに国元の妻が手紙を受け取り読むと、情熱溢れた手紙の内容である。同情した妻は「京にいる妹が豊前に来たいと言うので迎えをやつてほしい」と願い、まんまと都の女房を呼び寄せた。夫より先に都の女房に対面した妻は「こんな綺麗な女性を忘れてしまうような男だから、京にいる間は一度も自分のことを思い出さなかつただろう」と考え、そんな男を頼っていた自分を情けなく思い、髪を剃り落として出家してしまった。都の女房はこのことを知り、妻の後を追って出家し、同じ庵室に籠もってしまう。二人の女房に捨てられた佐伯も無常を感じ髪（もとどり）を切つて高野山に上ってしまった。清水観音のおかげで三人とも極楽往生を果たしたという。（この話のプロットは『平

家物語』「祇王」の段と類似しているので、『平家物語』を典拠としたかもしれない)

これもまとめると、訴訟で京に上った佐伯が女性と知り合い、深い仲となり勝訴して国元に帰る。国元に帰って三年、佐伯は都の女房のことはすっかり忘れ、都の女房は佐伯に手紙を送る。佐伯の妻が手紙を読み、京の女房を呼び寄せる。京の女房の美しさを見て、妻は男の情のなさに発心の心を起こし出家する。京の女房は出家した妻に感じて出家する。佐伯も出家し、三人は極楽往生する。

さてこの二つの話の相違点をみると、二つの話の関係が窺える。先ず、訴訟で家を離れるという構成や、男一人に妻が二人という三角関係にあるという人物設定が共通する。異なる点は出家の理由とそれを全うしたか否かである。「さいき」は女房達も夫も無常を感じ、出家の後極楽往生を遂げる。つまり本物の発心譚(ほっしんたん)といえよう。一方「鈍太郎」は双方の誤解によつて鈍太郎が出家し、二人の妻に説得されて結局三角関係の生活を続けるという結末となるのである。これは出家してすぐに還俗(げんぞく)するのだから、にせもの発心譚といえよう。

このように比べてみると狂言「鈍太郎」の作者は明らかにこの御伽草子「さいき」を意識して作ったものと思われる。さらに

踏み込んでいうと「さいき」のパロディとして狂言「鈍太郎」を作ったのかもしれない。もちろんこのような簡単な比較では確実とはいえないがパロディと考えると「さいき」という奇妙な題名も次のように考えられるのではないか。御伽草子の中で固有名詞つまり個人名が題名となつているものは異色である。だからこの「佐伯」を「才器」(才能があつて器量もある者という意味)の掛詞と考えるとどうだろう。そして「さいき」を「鈍太郎」の対義語と考えるとつじつまが合うのではないか。本当の出家を遂げて極楽往生できた人物は才器ある人物といえる。反対に女房に頼まれて俗世へ戻るような出家をする人物は鈍太郎と呼ぶのがふさわしい。

了



山田 師久(やまだ もろひさ)

大阪生まれ。本名・山田茂。一九八六年より安東伸元に師事。中世文学及び芸能を専攻研究。大和座狂言事務所の学術ブレーン。月例入輪讀会の座長を務める。学問的指導の他、若いスタッフたちには人生問題の良き相談役として長兄的存在。高等学校国語科教諭。

言動より行動

〜見ている人は見ている〜

森五六九(もりごろく)

落語という芸能に出会ったのが高校生の頃だから、落語とはもうかれこれ二十五年以上のおつき合いになる。それまで何に対しても割に飽き症だった私にとって意外にも落語だけは特別の存在だった。たちまち落語のとりこになった私はいつしかプロの道を志していた。どう考えても私にはたいした才能もない。にも関わらず現在もこの私がケツを割らずどうにかこうにか今だこの世界で生活している。その理由は何だろう。それはまず私がド不器用だということに他ならないと思う。ド不器用という才能は継続できるという才能に繋がっている。使い古されていささか陳腐に聞こえるかも知れないが「継続は力なり」。それともうひとつ、見守って下さる方々の存在だ。この事がどれほど励みになることか。「見ている人は見ている」ことがありがたい。

前にも書いたが、故桂春蝶の弟子三人、昇蝶、一蝶、そして私蝶六が揃って飲み会でもすると必ずと言っていいぐらい出る台詞がある。「そんなこと言つてたら親父(故春蝶)しくじるで。」「亡くなって十三

年以上たつて今だどこからか見られている気が何となくする。いわゆる怖い存在。もう時効だから許して欲しいが、我々三人は墓前で師匠の遺骨をかじりながら涙の酒を飲んだことがある。我々三人は体内に師匠を宿した。ああ・・・。とにかくいつも見られてるといふ緊張感ほど舞台人にとつて大事なものは無いと思つてゐる。見ている人は見ている。

ホテルの宴会の余興に呼ばれて一席ということがある。これが時になかなか辛いもの。その日はある会社の謝恩会で、会場には十人がけの丸テーブルが二〇卓ほど。特設ステージの上に組まれた高座には緋毛氈が被せてあつて座布団が一枚。ほろ酔い気分のお客様が私を迎えてくれた。出囃子と共に高座に上がると、一人の親父がチラリこちらを見て「こいつ誰やねん。知らんな」、露骨に嫌な顔をしたかと思つとまたぞろ大きな声で唾を飛ばしながら談笑を始めた。高座の咄なんてどうでもよく、きつと自分の自慢咄か何かを同じテーブルに座る他の人に聞いてもらいたくて仕方がないのだから。同じような輩が会場のそこかしこに居る。よほどこのまま帰ろうかと思つたがそこはグツと我慢。落語は口ひとつが頼りの芸。このようながさつな環境では手足を毛ぎ取られたも同然。しかし、困難はお客さんとて同じこと。この環境で咄を聞

こうなんて余程の集中力が必要だ。しかしそれでも、そこまでして聞いてやるうんたでありたいお客様がどんな会場どんな環境にも一人ぐらいは必ずおられる。無神経なデリカシーのない輩に目くじらを立てる場合ではない。このお客様のためだけにもしっかり勤めるべきだ。それにありがたいことにこんなところから次の仕事に繋がるが多々ある。「ああ、こんな環境でも目一杯がんばる奴やな」てなもん。

高座は常にオーディション、プレゼンテーションの場と思つていい。ついでに言うと、我々の評価はその時その時よりも次の依頼があるかどうかの方にかかつてゐる。自分がプロデュースの側にまわることもあるからよく分かるが、「二度とゴメン」という時ほど妙に誉めたりするもんだ。べんちゃらは本当に当てにならない。次の依頼があつて、初めて「この間はとりあえず一定の評価をもらえたんだな」と少しほつとする。「人を切る時は笑顔で」これ、世の習いだ。とにかく見ている人はちゃんと見ている。これはずいぶん前だが、私が以前足げく通つていた日舞のお師匠さんのお宅での出来事。その日はお師匠さんの誕生日。そこでその御祝の宴を開こうと言つことになり、私も含めお稽古人が数人集まつた。お師匠さんお手製のお料理を頂くことは度々あること。その日もやはりお師匠さんが作るこ

とになつて、私たちはその始まる三〇分ほど前に伺つた。主役にお料理を用意させるというのもおかしな話ですが、とにかくそういう事になつた。それで皆が揃つて一人の若い女性のお稽古人がお師匠さんにお愛想にこう言つたのだ。「私、お母さんのお料理が大好きなんです。ホント美味しい、前々から一度教えてもらいたいと思つてたんです」すると、すかさずお師匠さんが

「そんな愛想は要らん。ホンマに教えて欲しいと思つたのやつたら何故もつと早く来なさいのか。私が仕込みの買物に行く時間、調理を始める時間ぐらいつつものことで分かるやろ。それでエプロンのひとつも用意して、何か手伝わせて下さい」て来れば、何ほでも教えたるし、見て盗めるんとちゃうか。ホンマに気のある人間はそこまでするもんや」それはその女性にだけでなく我々全員に対するメッセージでもあつた。口先だけのべんちゃらはすぐに見破られるもの。上に立つ人はその人の「言動より行動」、そんなところを見ている。・・・見ている人は見ている。だから世の中捨てたもんじゃない。やはり大真面目が一番。



兆紀探求「子供は鏡」

小田兆紀

森五六九（もり ごろく）
大阪生まれ。落語名・桂蝶六。大蔵流狂言
方安東伸元に師事。現在、放送芸術学院、大
阪スクールオブミュージック専門学校、大阪
シナリオ学校の各非常勤講師の他、ECCア
チストカレッジの落語教室及び大阪府立桃谷
高校特別非常勤講師など、「高座」ならぬ
「講座」も勤める。現代社会にあつて、好ま
しい芸能人の在り方を模索中。

この7月末から和歌山県橋本市で子供を
対象にした子供狂言教室というのが発足し、
我々大和座が主管として深く関わる事にな
りました。文化庁への申請が通り、市の教
育委員会の後援もあつて行われる事になつ
たこの教室。師匠も当然その稽古に来て下
さるのですが、後学と今後の経験の為に
という事で私と金久が講師として3月まで子
供達相手に長い戦いを繰り広げなくてはな
りません。まだ過程でしかありませんがそ
の経過を皆様にご報告したいと思ひます。

皆様は狂言の稽古と聞くと一体どのよう
な事を想像なさるでしょうか。一般的な例
を申しますと、まず師匠を前に口移しの稽
古から入り狂言調子というものは一体どう
いうものなのかを實際聞き、声に出してそ
の体得を目指します。それから台本を覚え
て立ち稽古に移行、その際動きや狂言調子
の間違いや舞台上での作法や気構えの事な
ども指摘して頂き、昇華させていきます。
台本を覚えたからといってもう台本を読ま
なくてもいいのかというとそうではなく、
更に深く読み込んで登場人物の描写や作品
のメッセージを練り込み深いものにしてい
く必要もあります。

これは一般的な稽古の一例ですが、それ
は自ら進んで稽古にきて狂言から何かを持
ち帰りたい、触れたい体験したいと望む大
人に対して通用する理屈です。そういつて
望んでその場にやつてきた人はこちらから
の発信に対してある程度その方がこれまで
得てきた考え方や経験などで補完してく
れますが、子供にはこれが通用しません。
少し極端な例を申しますと、観客に対して
不必要に背を長く見せてはいけないとい
舞台上のルールが、どうして？となり、一
から説明しなくてははいけません。これまで
私はそういった方達に対して稽古をつけて
きた事がありますのでその説明を端折つて
しまつていましたが、対象が子供となると
そのような説明もきちんと納得のいくもの
をしなくてはなりません。「そういうもの
だからそうしなさい」ではいけないのです。
きちんと説明すればわかってくれますが、
そうでなければ、なかなかわかってもらえ
ません。

以前ある先生の推薦で小学校に狂言を教
えに行く機会を得た事がありました。その
時はどのように教えれば良いのかという事
で随分悩みました。何しろその時はまだ稽
古をつけるという経験がない時でしたので、
まず子供達へどのように接すれば良いのか
という事や必要以上に厳しくする必要は無
いにしてもあまり優しくする必要も無いの

ではないか、今まで見聞きしてきた事をそのまま伝えて小学生にわかってもらえらるるか等と色々と考えたのですが、結局自分だけの考えでやるうとした事はあまりうまくいきませんでした。結局推薦してくださった先生に色々と相談する事によって様々な問題が解決したのを覚えています。今でも忘れられないのは担任の先生に「どうか小田さんがはじめて狂言を見て純粹に感じた事、ご自身がやって楽しんで感じたままを子供達に伝えてあげて下さい」と言われた事です。それから「うまく子供達に接する事ができたと思います。借り物の言葉でいくら説明したとしてもそれは所詮自分の言葉ではありませんから、伝わらないのは当然です。背伸びした状態での発言は何の説得力ももたないのです。」

子供は純粹です。面白いと思ったものには興味を示し、面白くないと感じてしまったものには興味を示さなくなりません。その怖さは私自身身をもって体験しています。そして恐ろしいのはそれらを本能で嗅ぎ分ける事です。理屈なんかありません。見たまま感じたままを態度で示してくれませんが恐ろしい。そして教えた事をその場で体現できる瞬発力があります。そういう力を持っている時期だからこそ真面目に、真摯に狂言を伝えたい。

してわかりやすく、しかし本質を曲げないで真理を伝えるという事は自分自身にその理論が入っていないとできる事ではありません。ただ教えるだけならば少しかじればどなたでもできる事です。しかしそれはいけません。大和座の人間として講師をする以上、何故狂言なのか、何故それをやる意味があるのかという事も講義できなければ意味は無いと思っています。これまで得てきた事を整理し借り物の言葉で無い、自分自身の言葉で口に出して説明する良い機会と解釈して事に臨んでいます。教えた事や伝えたい事が多過ぎて難航しているというのが実情です。

先日口移しの稽古で、ある子供が私の口調そのままを真似した時、はつとなりました。私の間違いも含めた狂言調子そのままをトレースしたのです。そこで訂正しなければその子はそのまま正しくない口調で覚えて続けてしまつ。まさに子供は自身の鏡であると、子供を持った事の無い私がこのような形で体験する事にならうとは。どこで何が起こるかかわからないものです。子供だからと侮るのではなくむしろ子供だからこそ普段以上の必死さで伝えなければいけないと感じた瞬間でした。

何度も申しますが子供に教えるという事は本当に大変な事です。ですが、大変な分達成感も相当なものだという事も重々承知

しています。月二回の教室ですが、怖い反面それを楽しみにしている自分もいます。今後一体どのような展開ができるか、これが何よりの楽しみです。三月に向けて子供達と一緒に修練を重ねていきたいと思いません。

完



小田 兆紀(おだ ちようき)

一九七八年和歌山県新宮市生まれ。

本名・小田政明。大阪芸術大学舞台芸術学科卒業。大学の講義で安東の薫陶を受け、卒業後「大和座狂言事務所」に所属し研修を重ねている。二三年のイラン海外公演に参加、この経験は演劇を目指す人間として自覚を定める開眼脱皮の貴重な経験となった。二三年以来、橋本市の「市民狂言を楽しむ会」講師をつとめている。

狂言「痺痢」を題材にした演習台本

金久蒼汲

小中高高等学校の古典芸能鑑賞などを対象に、狂言「しびり」を題材にした実技を伴う演習を行い、狂言についての正しい分析理解をもらうことを目的とする。「しびり」を題材に選んだ理由は、まず主人と太郎冠者の会話で成り立ち、動きが比較的に少ないこと。終始二人の簡単明瞭な会話で、はつきりと起承転結するので、万人に理解されやすく、話の内容も共感を得やすいものが好ましい。また動きも簡単で単純なものの方が、後々説明しやすく、体験してもらいやすいものと思われる。次に上演時間が短いこと。一般的に狂言の上演時間は大体二十分前後がほとんどであるが、上演時間が長いと説明や演習に時間が掛かり、体験者や鑑賞者の集中力減退を招く恐れがある。その点「しびり」は十分程の演目で、鑑賞するにも体験してもらうにも調度良い上演時間と思われる。以上の点から、「しびり」は実技を伴う演習を行うのに最適な演目と考えられる。

演習の導入については、何の解説も加えることなく、鑑賞者の創造性に託してとにかくまず狂言「しびり」を観てもらうこと。先に解説やあらすじを加えてしまうと、鑑

賞者には単なる答え合わせにしかならず、正しい鑑賞は望めない。しかし演習時間によつては鑑賞に割ける時間が無い場合があるので、その場合はまず簡単な解説とあらすじを加えておいて、後の実技を伴う演習でなるべく「しびり」の内容を理解してもらいやすいように劇の進行に重点を置くことが必要と思われる。

演習参加者は十名前後。主人組、太郎冠者組に分かれてもらい、劇の進行に応じて順番に役を演じてもらう。以下は実際に演じてもらいながら、要所々々で加える解説を項目別に分類したものである。

能舞台

能・狂言の演劇技法は、三間四方の何も無い主舞台と、舞台と袖を繋ぐ橋掛かりを備える、能舞台の中で上演することを条件に考案されたものである。狂言「しびり」に登場する主人は、まず常座で名乗り、その後脇座へ移動し太郎冠者を呼び出す。主人に呼び出された太郎冠者は常座へ出て主人と対面する。狂言は基本的に、常座と脇座の位置で交わされる二人の対話によって劇が進行する。舞台の正面と下手側に「見所」と呼ばれる観客席を持つ能舞台においてこの位置が定まると、観客席から見て実に安定した構図が得られ、観客にも心地よい安心感を与えられるのである。

動きと型

狂言の姿勢は背筋を綺麗に伸ばし、重心は腰に置き、両膝を軽く曲げ腰を落とす。こつすること生木の板の上を足袋裸足で動く演者は、安定した姿勢や所作が可能になるのである。狂言師は風景を作ると言われる。三間四方の何も無い空間を演技の場にしていくわけであるから、あらゆる状況を簡潔明快な言葉と動きで表現しなければならぬ。それを的確に表現する為に、長年月に亘り多数の演者によって試行錯誤の結果定着されたものが「型」である。狂言「しびり」にもこの型は存在する。足が痺れたと言つ太郎冠者に、主人は呪いで治してやるつと、太郎冠者の額へ塵を付ける。不審に思った太郎冠者は右手で額の塵を取り、自分の前に差し出し、主人に質問するという場面である。このとき太郎冠者は余計な動きは極力省き座った姿勢で、左手で痺れた左足を抱えたまま右手で額の塵を取り、自分の目の前へ手の平を上にして差し出し、明らかに手の平の上に載っている塵に注視しているのである。そしてその後明らかに手の平を引つ繰り返して、塵を捨てるのである。一見何でもない動作であるが、右手に取った塵を確実に見るといふ型をすることで、演劇的な説得力を得ることができるのであるから、狂言の元素とも言えるこの「型」は、尊重しなければならぬのである。日常生活においても、あるひとつ

の動作を起こす際に、何を重視し、何を省くかという取捨選択を行うことで、その行動に明確な意思を持たせることができるのである。狂言の動きや型を考察し、その精神を応用することで、物事の真意が見極められたり、自分の意志や行動を効果的に主張できたりする力が手に入るのではないだろうか。

声と台詞

小中高校生を対象とした演習の最も重視すべき点は、声を発し台詞や謡を体験してもらおうという点である。狂言台詞や狂言歌謡の七五調は間違いなく日本語の言語センスを養うはずである。最初の言葉から最後の言葉まで明朗でリズム良く発声された台詞は、観客の耳に心地よく、二文字上がり三段起こしの抑揚は、一定のテンポと共に美しい日本語として観客の心に働きかけるのである。また狂言歌謡を歌うことで、日本語のリズムや間合い、力強さや言葉のキレを獲得できるのであるから、可能な限り声を出して体験してもらい、普段の会話に活かしてもらおうことである。狂言「しびり」には、名乗り、独白、対話、呼びかけなど、様々な台詞術が盛り込まれているので、それぞれの状況に応じた日本語の使い分けを体験してもらい、日本語に対する正しい認識を深めてもらいたい。

古典と現代

海外旅行をすると、人々の生活の中にその土地の古典的風物がさりげなく溶け込んでいる様子を見ることがよくある。日本のそのように変に珍重したり敬遠したりせず、日常生活の中に至極自然に存在しているのである。多くの先人達が培ってきた知恵や技術をぎっしり詰め込んだ古典は、その土地に生きる人間の精神を育成し、人間そのものを自立させる。その古典が自然に在るといふことは、自然に人間の心に作用を及ぼすということである。古典を人格形成の柱としている人間と、自らの手で古典を遠ざけている我々日本人と、果たして拮抗するものがあるだろうか。いくら流行の駅前留学をしたところで、人格形成の柱を持たない我々には、本当の異文化コミュニケーションは望めないのではなからうか。

また昨今、羞恥心を持たない日本人が急増している。ゴミを投げ捨てる者、歩き煙草をする者、地べたに座り込む者、公共の場で騒ぐ者など、他人が見ていようがお構いなしである。彼らは決してマナーを知らないわけではないが、恐らく恥かしいという思いも罪の意識も感じないのであろう。そのような行為を常習としている者は、友人や家族、教師や公共の面前などの日常生活のうえで、周りの目に映る自分の姿というものに悪影響を及ぼすものと思われる。それは姿勢や立ち居振る舞いといった第一

印象から、口調や会話、表情や目つきにまで表れてくるであろう。人として生まれ人間社会で生きていく以上、この他人に与える印象こそが、自分の将来を左右すると言っても過言ではない。常に他人に見られていくという意識を持ち、自然に自分を律し意志を明確に伝えられる技術を体得することが必要と思われる。その為の教材として、狂言は最適ではないだろうか。狂言の真理を見据えた無駄の無い動きと、美しい日本語の持つ明確な台詞術と、全身を観客にさらし出す勇氣の内、どれか一つでも体得することができたならば、それが良い人間関係を生み出し、自分の魅力も引き出されるのではないだろうか。

上記は、狂言「しびり」を実際に演じてもらいながら、適切と思われるところで加える解説と問題提起、そして狂言の活用方法を簡潔に書き出したものである。演習の時間やそのときの状況に応じて、方法や優先順位は変化すると思われるが、我々が参加者に理解してもらいたいことは常に同じである。狂言という古典は、室町時代を今に伝える単なる昔話ではなく、その精神を肉体化することで日本人としてのアイデンティティを確立させる最適な栄養素のひとつである。この演習が、未だ成長途中の小中高校生の、人格形成の柱になつてく

れることを願うばかりである。今回は普段、実際に現場で感じたり、考えたりしていることを整理する意味も込めて、私達は狂言を通して、彼らに何を伝えるべきか、ということを演習台本にしてみました。とは言え、あまりにざつと書き出したので、解り辛い部分もありますが、何卒ご容赦いただきたいと思えます。

大和座狂言事務所関連 催しのお知らせ

十一月

五日【土】午後一時 大槻能楽堂

「上野定期能」

弱法師・柑子・葵上ほか

「お問合わせ」

朝陽会館 〇六 六三五一 〇一〇二

十二日【土】午後一時 大槻能楽堂

「大槻同門能」

頼政・仏師・鉄輪ほか

「お問合わせ」

大槻能楽堂 〇六 六七六一 八〇五五

十三日【日】午前十一時 法然院

「洗心会秋の素謡会」

道成寺ほか

入場随意

「法然院（京都市左京区鹿ヶ谷）」

二十六日【土】午後二 羽衣国際大学4階ホール教室

「HEC狂言会」

萩大名・福の神・仏師ほか

来場歓迎

十二月

十四日【水】午後二時

「古典芸能と出会ったとき」その三十八
新シリーズ《日本語のちから》

「主人の言葉」 「武悪」

恒例歳末コラボレーション

ゲスト/岩崎勇（オーボエ）

会場 千里中央「A&Hホール」

出版のお知らせ

安東伸元・中野愼子著

『狂言画写の世界』

影印・作品解説・装束の着付・装束の構成

和泉書院出版

B5上製・全186項

定価5250円(税込)

本書は近世末期（天保十五年）の狂言舞台の写し絵を影印した書で、当時の演技、装束作り物を知る上で有用な資料となっております。書誌学の所産であると同時に、描かれた各曲の作品解説、現在舞台上で使われている狂言装束の被服学的考究（装束の構成）と着付けの技法を解説する連続分解写真資料（装束の着付）とを付録しているために、他に類を見ない出版物であると言えます。

和泉書院 〇六 六七七一 一四六七

<http://www.izumi-pb.co.jp>



金久蒼汲（かねひさ そつきゅう）

一九七八年広島県呉市生まれ。

本名・金久寛章。大阪芸術大学舞台芸術学科卒業。小田とは同期。同じく安東に師事して稽古に通い卒業後、「大和座狂言事務所」に所属して研修を積んでいる。演劇人としての肉体訓練の重要さを自覚して日々精進を怠らない律儀さを持っている。二一三年、イラン公演で処女海外旅行を果たす。二四年インドネシア公演旅行に参加。

編集後記

大学院受験の前、指導教官になって頂きたいと思っていた先生に大学院に入って勉強がしたいのだと相談をしに行った事がありません。その時先生は学者を指す院生の心構えとして必要なのは「退路を断つこと」

であると言われました。この世界は大変厳しいので、それくらい心構えがないと生き抜いていけないので、覚悟がないのなら院に入らない方がよいとおっしゃったのです。「退路を断つ」というのは院生活を送りながらそれまで持っていた逃げ道の一つ一つ切り捨てていって自分が進もうとする道を最後の一本に絞るものではなく、そもそも他の逃げ道なんて抱えて入ってはいけないということです。言いかえると退路を持つている者は入ってはいけない世界ということになります。

院生は常に将来に対しての不安を抱えながら勉強をしています。自分は学者になる素質はあるのだろうか、良い研究、悪い研究を見分ける力が自分にあるのだろうかと常に自問自答しながら緊張感を抱きつつ過ごしています。これが院生時代が一番辛いと言われている所以なのです。だからこそ退路を持っている者は入らない方がいいとおっしゃった訳です。いつでも違う道へ方向転換・・・なんて中途半端な気持ちで勉

強しても、ものにならないのでしよう。

「これだけは誰にも負けない！」というものを得るためには、それこそ退路を断つて命を賭けてむかっていかないとけません。

これらの心構えは何も学問の世界だけの話ではないと思います。芸術の世界も事業の世界もあらゆる分野の様々なジャンルにおいて、その世界を極めるとなれば命を賭けてかからないと手にする事は出来ないと思います。「命を賭ける」といった言葉が古くさく思われているのが、大層に思われているのか、最近ではあまり使われなくなりましたが、しかし何かを成し遂げるためにはやはりこのくらいの覚悟は必要だと思います。今の時代がいくら気軽に手頃で楽しく簡単に・・・を歌つていようと、決めた道を進むと決めた以上、地道で血のにじむ努力をしつつ、前を向いて進しかないのです。短大を卒業する時にも「こうありたい！こうなりたい！」と云う事を何時も念じて生きて居るとそうなるだろう事を信じてわが道を進んで下さい」というお言葉を安東先生より頂きました。信じて前進するしかありません。

本格的に論文を書いたり学会へ参加して勉強したりするようになって、学部生の頃は知らなかった事を知り、見えなかったものが見えてきています。いかに取り組むべきか、きちんと見据えるべきだと痛切に感

じたわけです。

今回もまた大きな事を言ってしまった。全ては自分自身に言い聞かせつつ尻を叩いているわけです。未来の事ですので、結果的に私がどうなるかはわかりませんが、「こうありたい！こうなりたい！」と命を賭けて目指すものがありますので、これからも大きな事を言っていきます。院の指導教官がこんなこともおっしゃいました。「大きい事を言ってしまった時は、自分が吐いた言葉の責任をしっかりと背負って一生をかけてその償いをしていくのです。」と。私も自分が吐いた言葉の責任をとるために、これからも奮進していきます。

秀

発行日 二〇〇五年 十月十二日

編者 許 秀美

発行者 安東 伸元

大和座狂言事務所

代表 安東伸元

千五六五〇八四一

<http://homepage3.nifty.com/yamatoza>

e-mail: BYX04535@nifty.ne.jp

吹田市千里山東二丁目3の3

TEL 06(9384)5001

FAX 06(9384)0807